



—世界に飛び出した「秋田人」—

むのたけじ、「たいまつ」を休刊し海外へ

北条 常久

(あきた文学資料館 名誉館長)

私は、むのたけじが平成26年3月に、秋田県立明德館高校（定時制）の卒業予定者に次のように話しかけたのを聞いた。

私は、小学校6年、中学校5年、専門学校4年の間にカンニングをしようと思ったことが一回だけありました。中学校に入って、英語だけはどうしても好きになれない、あのアルファベットというのがなんとも気持ちが悪い。AとかBとかが妖怪のように見えるのです。しかし、カンニングでなんとか急場はしのげるが、これから5年、この妖怪とつきあわなくてはせつかく入った横手中学をやめなくてはならない。それならお化け退治をしてやろうと、親に話して読み仮名のついた安価な英和辞典を買って貰い、学校の行き帰りにその辞典を声に出して読み暗記しました。お化け退治に成功し英語ができるようになり、ついに外国語学校に行くことになりました。みなさん、英語を書いて覚えようとしていませんか。書きことばの歴史は5千年ぐらい、しかし、人間は有史以来話しているのです。みなさん、英語などにへこたれてはいけません。お化け退治をしてごらん下さい。

むのたけじは、東京外国語学校スペイン語科に進学。彼は、スペイン語でもお化け退治をやっ

たのか一番の成績で卒業したそうである。

東京外国語学校の各科は、恒例で専攻の言語で演劇を上演し、その言語の大使館をも招待する。この伝統は東京外国語大学になった現在でも受け継がれている。むのが3年生の時の出し物は、セルバンテスの「ドン・キホーテ」であったが、女子学生がいないのでスペイン語が達者で小柄なむのが、ドン・キホーテの相手女性ドゥルシネア役に抜擢された。築地小劇場に舞台装置と化粧係を委託したので、むのは可愛い村娘に変じ役を見事に演じた。彼の発音があまりに美しく、スペイン大使館の女性たちからは、日本人の男性とは思われないという疑念が起こったので、劇終了後脛をまくって秋田弁で挨拶したというエピソードが残っている。

卒業後、彼は「報知新聞」に入社し、「朝日新聞」にトレードされる。

昭和17年5月、彼はインドネシアのジャカルタ支局に派遣される。彼は、私に次のように語り、インドネシアの民謡ブンガワンソロを唄った。

私が、今一番しゃべれるのは、インドネシア語です。あそこに1年いましたから。言葉というものはしゃべれる所へ行って学ばなければ駄目です。インドネシアに行った時も、町で普段しゃべれる言葉を身につけたのです。

むのたけじは、戦後、昭和23年2月2日に横手市で「週刊たいまつ」を創刊し、昭和53年10月30日の780号をもって休刊した。彼は私との対談の中でその理由を次のごとく述べている。

第一は、「たいまつ」を30年も出して来て、戦後デモクラシーと軌道を一にして来たわけだが、それが土台と噛み合わない。歯車は回っているのだが、少しも前に進まないという虚しさを感じた。だから「たいまつ」を出すことは惰性の延長ではないかと考えるようになった。

第二は、記事を書くのに、周りの情勢が良く見えなくなった。横手に坐っていて外国のことを知ろうとすると、マスコミで知るしか方法がない。ストレート・ニュース、すなわち、何所で、何が起きたかということは、新聞、テレビなどに依存するわけだが、70年代の最後の頃になると私には何が何だかさっぱり分からなくなった。世界はまるで別な所で動いているのではないかと思えてきて、自分で確かめなくては駄目だと痛感した。

第三は、そろそろまとめたものを書いておきたいと思うようになった。

第一の理由に挙げられた「戦後のデモクラシーの歯車が、少しも前へ進まない虚しさ」とは、社会主義者の彼は60年安保、70年安保、三里塚闘争の敗北が身に沁みているのであった。

第二の理由は、郷土の文化人を記事にするだけで、彼等と交われない虚しさがあったからであろう。

例えば、「たいまつ」392号（昭和31年9月29日）では、

〈東洋舞踏の創造を 中国への旅に行く〉

石井漠は「舞踏は民族の顔だ。翻訳のいらぬ国際語です。国際的な文化交流となれば、心が結ばれて、支配者が戦争をやろうとしても、戦争なんかできなくなりますよ」と語る。

「たいまつ」426号（昭和32年7月20日）には、

「種蒔く人」の小牧近江が、ロンドンで開催された世界ペン大会に日本代表で出席、大会終了後、ヨーロッパ各地を視察し帰国した。帰国後、7月16日横手高校で次のように語った。「人間には、光と空気と水が必要だ。横手はそれがそろっている。ヨーロッパの学問の都ハイデルベルグを連想させる。町の雰囲気にも共通したものを感じる。横手市の伸びる道は文化の府となることではないか」

といった記事を掲載している。

むのたけじは、東京外国語学校出身の元朝日新聞記者、外国通であったろう。

しかし、戦後30年、外国にも直接行くことができる時代ともなれば、外国から直接情報を得てくる人間に比べ時代に乗り遅れていることを痛感した。彼は、「たいまつ」を休刊すると外国に吹っ飛んでいった。スペインの町々は彼を待っていた。彼はその町の人々のスペイン語を聞いて自身のスペイン語を再確認したのであろう。

むのたけじは、東京オリンピックでは、スペイン語の通訳をすると張り切っていたが、平成28年8月21日に102歳で彼岸の人となった。言葉はその国の人々の生活の中から学ぶべきなのだとは彼は教えてくれた。